

交換留学修了レポート

留学先大学（国名）	イエーテボリ大学（スウェーデン）	留学期間	2015年8月～2016年6月
所属学部・専攻	人文学部 国際社会コミュニケーション学科	性別	女性

【生活に関するレポート】

イエーテボリでの生活に関して、8月末から10月頃までは日本でいう秋といった感じで、少し肌寒くコート等が必要であった。一方で10月も半ばになると日本でいう冬といった感じで、日が徐々に短くなった。ただ、室内はセントラルヒーターのお蔭で暖かく、お手洗いまで寒いといったことはなかった。

イエーテボリはスウェーデンの第二の首都というだけあって、有名な歌手が公演したり、スポーツのヨーロッパ大会が主催されることも多かった。日本に関連したイベントといえば、NärCon（ナルコン）というアニメや漫画のグッズを販売したり、ファン同士が交流をしたりとコミケのようなイベントや、Göteborgs botaniska trädgård（植物園）の日本庭園では桜の開花時期に合わせてお花見イベントが開催されていた。また芸術鑑賞に関して、学生料金で演劇やオペラなどのチケットを安く入手することが可能。

私の参加したボランティアは、イエーテボリ日本人補習校で学習指導の補助、高校の日本語授業の補助、老人ホームで折り紙体験のお手伝い・茶道体験の主催。中東からの難民と現地の人々の交流を目的としたイベントの手伝いである。基本的に日本文化を紹介するイベントに参加することが多かったが、そういったイベントに参加したい時は、上記に挙げた日本人補習校を通して、現地在住の日本人から情報をもらうようにすると良い。

イエーテボリ大学について、北欧で最も大きな大学のひとつとあって、国内外からの学生数が多く多種多様な学生と出会うことができる。また、チャルマース工科大学も近隣にあり、イエーテボリの町全体が「学生の町」という感じで賑わっている。イエーテボリ大学に関して、学部ごとに雰囲気は異なるがどの学部の図書館も使いやすく建物内のインテリアデザインも明るい色使いが多く、いかにも北欧デザインといった感じがかった。

言語について、私は日常生活でも授業の場面においても基本的に英語を使用して生活していた。スウェーデンは自称「英語を世界で一番流暢に使いこなせる国民が多い国」なので、基本的に日常生活において言語で困ることはなく、スーパーなどで英語表記のものが無く困っていても他の買い物客に尋ねると親切に英語で答えてくれた。これはスウェーデンの精神をよく反映しており、日本は外国人が「困らないように」と主要な外国語で標識などを示すことが多いが、スウェーデンでは誰も「困ったら助けを求めろ」だろう、という事で移民の多いスウェーデンではあるが、広告以外は大抵スウェーデン語表示になっている。スウェーデン語は、ドイツ語と非常に似ており、英語とも共通点を持っているので簡単なものであれば日常生活の中で自然と身に着くと思われる。

最後にイエーテボリ周辺には、テキスタイルで有名な Borås などがあり、また、バスで二時間ほど走ればスキー場もある。そして、イエーテボリを縦横無尽に走る路面電車とバスの公共交通機関を利用すれば、イエーテボリ中心街から少し離れて、夏は海から湖、森を満喫し、冬は凍てついた湖でスケートにも挑戦できる。

交換留学修了レポート

【学習に関するレポート】

履修授業数について一つの学期に4つの授業を履修可能であった。単位の区分については一つの授業を7.5hecとカウントし一学期間で30hecまで取得可能であったが、授業のプログラムによっては、2コマ分の授業がセットになっており、その授業を取ると自動的に15hec取得したことになるものもあった。授業のプログラムによって授業の開講日数や時間は様々で、教育学部・経済学部・ソーシャルサイエンス学部の授業は、二週間に一度で2か月だけのものから、週に二回2か月のものもあった。ただ、授業回数の少ないものは課題図書が多く、自己学習が中心のイメージであった。注意点として、授業の日程が重なる場合は、期末のエッセイの時期などとても忙しくなるので、事前に授業予定を確認しておく必要がある。

授業形態については日本とは異なり、教育学部・ソーシャルサイエンス学部に関して、私が履修したものはフィールドワークが多く、学外に出て教育学部の授業であれば、学校施設を見学し実際に児童や生徒と触れ合う事や、教師と意見交換する機会も設けられていた。また、ソーシャルサイエンス学部のメディア・ジャーナリズムの授業では、イギリス出身でガーディアンの記事も務めたジャーナリストが授業を一度行い、とても実践的で興味深い話を聞くことが出来たし、質問することもできた。成績評価については、授業中の態度に加え、ホームイグザムと言われるエッセイの提出が主であった。それに加え、授業によってはエッセイの内容をクラスに向けて発表するものもあった。

授業全体の印象として、座学というよりは、実際に自らの経験を踏まえて、クラスメイトとの話し合いによって授業が進められていく形態のものが多かった。クラスメイトが多国籍で多様な文化的バックグラウンドを持っているので、基本的に国ごとの比較が多く用いられており、グループやクラス全体に発表をすることも多かったが、自国の事を発表する事に加え、自分の意見を織り交ぜることが求められていた。海外の大学院を経験した方に、西洋の文化として「黙っていると意見の無い無能な人間」と思われるというものがあると聞いたことがあったが、実際に何も言わないでいるとグループワークにおいて、議論から取り残される、グループで発表の際も参加できないなど授業を受けている意味がないといった状況に陥ってしまった。

講義を受ける際、学生は積極的にわからない点を質問しており、ただ黙って聞いているという授業は一度もなかった。授業に出てくるキーワードとなる英単語などは、授業の前に読むことになっている事前課題をこなしていれば身に着けることが出来るもので、授業は電子辞書を持参すると難なく理解できる。また、パソコンを持ち歩いている学生も多く、メモを取ることに活用したり、授業で分からない情報などはその場で調べていた。それに加え、教師の用意している教材は、パワーポイントなどで作成されたものが多く、ノートを取る時間はあまりなかった。総じて、日本とは異なる「自発的」で面白い授業が多かった。